

市立小樽文学館収蔵小林多喜二関連資料

市立小樽文学館学芸員 玉 川 薫

2007年3月現在、市立小樽文学館で収蔵(含寄託資料)している小林多喜二関係資料のおもだったものを、すべて掲載した。なお、本目録後半で常設展示している資料を合わせて一覧にしている。

※印で簡単な注釈を施した。

小林セキ(多喜二の母) 佐藤チマ(多喜二の姉) 旧蔵アルバム

石本武明原稿「若い頃の多喜二との思い出」(市立小樽文学館特別展「多喜二の青春——その彷徨と発見」) 掲載 1983年10月)

小林多喜二「蕨入」(『新興文学』1923年7月号入選作)

阿部次郎『三太郎の日記』1918年5月1日 岩波書店※小林多喜二旧蔵 書き込みあり

志賀直哉『荒絹』1921年2月23日 春陽堂※小林多喜二旧蔵 署名あり

ストリンドベルヒ『赤い部屋』阿部次郎・江馬修訳 1921年7月20日 新潮社※小林多喜二旧蔵 自筆書き込みあり

『小樽高等商業学校校友会々誌』28号※小林多喜二「継祖母のこと」掲載

『小樽高等商業学校校友会々誌』30号※小林多喜二「ロクの恋物語」掲載

『小樽高等商業学校校友会々誌』32号※小林多喜二「ある役割」掲載

アンリ・バルビュス『クラルテ』小牧近江・佐々木孝丸訳 1923年4月12日 叢文閣

『クラルテ』第参輯 1924年9月17日 クラルテ社※小林多喜二が匿名で「赤い部屋」執筆

『小樽高等商業学校同窓会会員録』大正十四年十月一日現在 1925年10月1日 小樽高等商業学校同窓会

『小樽高等商業学校同窓会会員録』大正十五年十一月一日現在 1926年12月1日 小樽高等商業学校同窓会

『同窓会々員録』昭和五年十二月現在 1930年12月2日 小樽高等商業学校同窓会

『海上生活者新聞』第1号 1929年1月5日 海上生活者新聞社(複製)

『海上生活者新聞』第2号 1929年2月14日 海上生活者新聞社(複製)

『海上生活者新聞』第3号 1929年3月22日 海上生活新聞社(複製)

『昭和二年六・七月 小樽港湾争議一覽表』北海道庁警察部

『新機械派』第1年第1号 1930年3月5日 小樽・新機械派編集所※編集発行人勝見茂。小林多喜二の意向が強く反映された同人誌。小林多喜二の評論「『機械の階級性』について」所載。

『新機械派』のアンケートに寄せられた回答ハガキ※上泉秀信、神原泰、板垣鷹穂、中野重治、中河与一、雅川滉、岩藤雪夫、外山卯三郎、久野豊彦、葉山嘉樹、伊藤整、新居格、飯島正、今東光、岩村忍

元北海道拓殖銀行行員故小林多喜二創作集 (故柴田徳秋氏製作・旧蔵)

川口浩「小林多喜二論」(『人物評論』1933年4月)

立野信之「小林多喜二の事」(『文藝春秋』1933年4月)

貴司山治「主要課題のこと」(『時事新報』1933年3月3日※「地区の人人」)

杉山平助「リベラリズム台頭」(『文藝春秋』1933年4月)

徳直直「『同盟の旗が折れた』小林多喜二についての断片」(『東京朝日新聞』1933年2月22日)

大宅壮一「小林多喜二の死 絶えず前進する底力」(『時事新報』1933年2月22日)

大宅壮一「作家としての死せる小林多喜二君」(『読売新聞』1933年2月22日)

小林三吾「兄多喜二を語る」(『人物評論』1933年4月)

「プロ作家労農葬断然解消の弾圧」(『北海タイムス』1933年3月16日)

「三十六名検束」(『北海タイムス』1933年3月16日)

「俳優を缶詰『沼尻村上演禁止小林の労農葬に弾圧』」(『東京朝日新聞』1933年3月17日)

「プロ作家の遺骨で其筋が鵜の目鷹の目」(『小樽新聞』1933年3月10日)

「景観を尻目に下車した義兄」(『小樽新聞』1933年3月10日)

「小林多喜二氏の追悼会に弾圧」(『小樽新聞』1933年3月8日)

「小樽署員徹宵労農葬厳戒」(『北海タイムス』1933年3月16日)

「変死したプロ作家小林多喜二氏の生立」(『北海タイムス』1933年2月24日)

「宮本顕治を追跡」(『東京朝日新聞』1933年2月29日)

「プロ作家の遺骸三病院で解剖拒絶」(『北海タイムス』1933年2月23日)

「小樽市内に過激ビラ撒く」(紙名・日付なし)

勝本清一郎「『蟹工船』その他」(『新潮』1929年7月)

前田河廣一郎「同志レスルスを案内する」(『改造』1930年3月号)※「不在地主」

稲田美津雄「現代文芸作品の法律的誤謬」(『新潮』1930年5月)※「不在地主」

廣津和郎「文藝時評」(『改造』1930年3月号)※「暴風雨警戒報」

中村武羅夫「マルクス主義文学の存立は可能であるか？」(『新潮』1930年5月)※「工場細胞」

中村武羅夫、他「新潮合評会」(『新潮』1930年5月号)※「工場細胞」

窪川鶴次郎「文藝時評」(『中央公論』1931年8月)※「独房」

岡沢秀虎「プロレタリア小説壇の現状」(『文学時代』1930年4月号)

- 文壇郷土誌プロ文学篇 13「立野信之の登場 小林多喜二の劇」（『時事新報』1933年4月19日）
「ナツブ結成直前 小林多喜二上京」（4月20日）「三・一五を描き小林から蔵原へ」（4月25日）
「銀行を餓首され小林多喜二上京」「小林と蔵原との初対面の時の事」（5月1日）「小林サイン攻め『戦旗』講演会で」「大阪の会場で青年団を放逐」（5月3日）「梅田ホテルで片岡鐵兵検挙」「小林も検挙さる五月二十日事件」（5月4日）
「小林多喜二君の実家に亡霊」（『小樽新聞』1933年7月16日）
「蛙の目 作家同盟の言論封鎖」（『時事新報』1933年4月13日）
「蛙の目 まつすぐにならう」（1933年5月1日）
曾我八郎「蛙の目 小林多喜二に与へた志賀直哉の手紙」（『時事新報』1933年6月5日）
春野遠「動くプロ文壇」（『文藝春秋』1933年4月号）
「小林多喜二君の死について……」（『人物評論』1933年4月号）
「多喜二の死が与えたショック」（『人物評論』1933年4月号）
神近市子「文藝時評 頼もしい新人」（『東京朝日』1933年6月2日）
平林初之輔「文藝時評四」（『東京朝日新聞』1928年11月12日）※「一九二八年三月十五日」
平林初之輔「日本のシンクレア — 小林君の「蟹工船」—」（『東京朝日新聞』1929年5月7日）
※「蟹工船」
蔵原惟人「作品と批評一蟹工船その他1」（『東京朝日新聞』1929年6月17日）
蔵原惟人「作品と批評二「蟹工船」その他2」（『東京朝日新聞』1929年6月18日）
「文藝盛衰記 新興文学の巻（九）」（『東京朝日新聞』1929年6月21日）
中村武羅夫「「不在地主」と「セムガ」とを評す（上）」（『読売新聞』1929年11月2日）
水守亀之助「コンミュニズム文学なぞ一つもなし」（『東京朝日新聞』1930年12月8日）※「工場細胞」
片岡鐵兵「小説の技術について」（紙名・日付なし）※「東倶知安行」
宮島新三郎「壁小説と赤色レビュー」（紙名なし 1931年7月29日）※「テガミ」「独房」
林房雄「文学の聖火はプロ派で」（『読売新聞』1933年3月3日）
青野季吉「創作の中から」（新聞不明・1932年3月29日）※「沼尻村」
「豆戦艦 四月の雑誌」（『東京朝日』1932年3月31日）※「沼尻村」
横手丑之助「豆戦艦 三月の雑誌」（『東京朝日』1933年2月22日）※「地区の人々」
廣津和郎「おのづから襟を正す小林多喜二の遺作」（『読売新聞』1933年3月28日）※「転換時代」
榊山潤「反動期のプロ文学 夥しい伏字の問題」（『時事新』1933年3月28日）
西脇順三郎「小説家の型 小林氏の天分を惜しむ」（『東京朝日』1933年3月30日）※「地区の人々」
「蛙の目「転換時代」の危険地帯」（『時事新報』1933年5月24日）
「こばやしたきじ（小林多喜二）」改造社調査部編『最新世界人名辞典』1932年6月号
小林多喜二著『地区の人々』（広告）（『東京朝日新聞』1933年6月）

「プロ作家小林多喜二氏築地署で突如逝く」(『東京朝日新聞』1933年2月22日)

「相次ぐ急死事件左翼に大衝動」(紙名・日付なし)

「死亡診断」(紙名・日付なし)

「老母半狂乱」(紙名・日付なし)

「出世作は『蟹工船』」(紙名・日付なし)

「龍介の経験」(『極光』1925年8月25日作)

「女囚徒」(1927.3.8作『文藝戦線』1927年2月号)

「誰かに宛てた記録」(1928.1.1—3作『北方文藝』1928年6月号)

「東俱知安行」(1928.9.5作『改造』1930年12月)

「一九二八年三月十五日」(1928年8月17日作『戦旗』1928年11・12月)

「蟹工船」(1929年3月30日作『戦旗』1929年5・6月)

「不在地主」(1929年9月29日作『中央公論』1929年11月)

「工場細胞」(1930年2月24日作『改造』1929年4・5・6月)

「オルグ」(1931年4月6日作『改造』1931年5月)

「独房」(1931年6月9日作『中央公論』1931年7月)

「テガミ(壁小説)」(1931年6月30日作『中央公論』1931年8月)

「母たち」(1931年10月11日作『改造』1931年11月)

「沼尻村」(1932年3月8日作『改造』1932年4・5月)

「転換時代」(1932年8月25日作『中央公論』1933年4・5月)

「地区の人々」(1933年1月10日作『改造』1933年3月)

小樽市街図1933(S8)4月頃迄

1977.11 風間六三作成

東京芸術座小樽公演「蟹工船」ポスターとチラシ※1970年7月24日 小樽市民会館

東京芸術座「蟹工船」小樽公演ポスター※1977年6月8日 小樽市民会館

「蟹工船」原稿(複製)

『プロレタリア芸術教程』第2輯(1929年11月20日 世界社)※小林多喜二「プロレタリア文学の大衆化とプロレタリア・レアリズムに就いて」所収

『プロレタリア文学』第2号(1930年7月5日 白揚社)※鹿地亘「小林多喜二の印象」所収

『総合プロレタリア芸術講座2』1931年6月10日 内外社※小林多喜二「小説作法」所収

『プロレタリア文学』創刊号 1932年1月1日 日本プロレタリア作家同盟※小林多喜二「転形期の人々」所載

『農民の旗』1931年11月23日 新潮社※小林多喜二『戦ひ』(「不在地主」削除部分)所収

『ナップ』第1巻第3号(1930年11月10日 戦旗社)※左翼劇場公演『不在地主』の舞台写真、江口渙の劇評掲載。

伊藤信二ハガキ 1931年7月14日※中野重治気付小林多喜二宛

『プロレタリア文化』第3巻第8号 1933年12月10日 日本プロレタリア文化聯盟出版所※『小林多喜二全集』 広告所載

『小林多喜二全集』第1巻 1935年3月31日 ナウカ社

『小林多喜二全集』第2巻 1935年5月20日 ナウカ社

『小林多喜二全集』第3巻 1935年6月20日 ナウカ社

『小林多喜二書簡集』1935年8月1日 ナウカ社

中條百合子書簡大熊信行宛※昭和8年(1953)7月18日消印。かつて小樽高商に勤め多喜二とも交流、昭和8年当時高岡高商教授だった大熊信行に小林多喜二全集刊行の援助を求めるもの。

田口タキ宛最後のハガキ※1933年1月20日ごろ、久しぶりに訪ねたタキが外出中だったため、タキの母に渡してきた絵ハガキ。

小林多喜二の死を報じる各紙の切り抜き※母と姉によって保存されたもの。

小林多喜二虐殺に抗議し、小樽でまかれたピラ

小林多喜二デスマスク石膏原型

『文学新聞』1933年3月号・4月号

没後まもなく掲載された『中央公論』「転換時代(党生活者)」広告(読売新聞1933年3月18日)

『中央公論』第48年第4号 1933年4月1日 中央公論社※小林多喜二「転換時代」(党生活者) 所載

「党生活者」伏せ字なしの校正刷

『小林多喜二全集』第3巻(1935年6月ナウカ社)に収録。貴司山治から中野重治に渡され戦中ひそかに保存された。封筒の表書きは中野重治自筆。

小林多喜二原作大沢幹夫脚色「沼尻村」マルクス五十年祭記念公演(リーフレット)1933年3月18~31日 築地小劇場

小林多喜二『沼尻村』日本プロレタリア作家同盟叢書第2篇 1932年8月30日 日本プロレタリア作家同盟出版部(復刻版)

小林多喜二虐殺に抗議し、小樽・札幌でまかれたピラ

葬儀のおりの香典・供花・供物控

パンフレット「小林多喜二略伝」1933年3月25日 日本プロレタリア美術家同盟出版部※絵・岡本唐貴

小竹義夫画「小林多喜二のお母さん」1947年5月6日鉛筆・紙

『大衆の友』号外1933年3月10日 日本プロレタリア文化連盟(複製)

富樫正雄画『小林多喜二の死面』を背にする小林セキ 油彩・キャンバス

富樫正雄画「小林多喜二肖像」油彩・キャンバス

大月源二画「小林多喜二没後三十年記念祭」ポスター原画 1963年

小林多喜二文学碑起工式～建築～除幕式写真パネル

以下常設展示中

小林多喜二6歳の頃(写真)※姉、妹と。裏書きは姉、佐藤チマ

小林多喜二著『東俱知安行』新鋭文学叢書 1931年3月16日 改造社※扉に「妹へ！幼き日の思ひ出に。小林多喜二一九三一・三・二六」の自筆献辞あり

潮見台小学校尋常科卒業児童学籍簿索引自明治四十一年度至昭和五年度(コピー)

『尊商』第3号(1920年3月31日 小樽商業学校々友会)※庁立小樽商業学校校友会誌。小林多喜二は当時17歳、本科2年生。習作「病院の窓」「電燈の下で」、詩「秋の夜の星」、「秋が来た!!」を掲載

『北方文藝』第5号 1927年10月 小樽高商文藝研究会

小林多喜二「残されるもの」所載。

『創作月刊』創刊号 1928年2月 文藝春秋社※郷利基(小林多喜二)「最後のもの」所載

『SILAS MARNER』※小林多喜二旧蔵。イギリスの女流小説家エリオットの代表作。小樽高商時代のテキスト。書き込み多数あり。

小林多喜二はがき石本武明宛 大正10年(1926)7月26日(複製)※石本武明は小樽商業学校時代の友人。はがきは小林多喜二が小樽高等商業学校へ入学した直後のもので、現存する書簡のうち最初期のもの。

『新樹』第3集 1923年11月 新樹短歌会※小林多喜二「歴史的革命と芸術」所載

政治批判社編輯『マルクス主義講座』6 1928年5月20日 マルクス主義講座刊行会※小林多喜二旧蔵

エンゲルス『フォイエルバッハ論』改訂版 1926年9月8日 同人社書店※佐野文夫訳。小林多喜二旧蔵

『クラルテ』創刊号 1924年4月 クラルテ社※小林多喜二が北海道拓殖銀行に勤めはじめた月に創刊した同人誌。誌名は人民戦線を主唱したフランスの作家、アンリ・バルビュスの雑誌『クラルテ』(光明)にちなんだ。創刊号に多喜二は「暴風雨もよい」(小説)ほかを執筆。1926年3月までに5冊発行された。

『新選 葉山嘉樹集』1928年6月12日 改造社※小林多喜二が決定的影響を受けた作家

『新機械派』第1年第1号 1930年3月5日 新機械派編輯所※武田暹、野口七之助らが中心になり、多喜二や伊藤信二が参加した同人誌。多喜二は評論「〈機会の階級性〉について」を寄稿
小樽港湾争議関係ビラ(複製)

小林多喜二『蟹工船』戦旗社改訂普及版販売ポスター

『戦旗』1928年11月号(1928年11月1日)12月号(1928年12月1日)全日本無産者藝術聯盟本部※小林多喜二「一九二八年三月十五日」一・二掲載

「一九二八、三、一五、」ノート稿（複製）

『一九二八年三月十五日』1930年5月13日 戦旗社

『戦旗』1929年5月号（1929年5月1日）・6月号（1929年6月1日）戦旗社（発禁）※小林多喜二「蟹工船」掲載

小林多喜二『蟹工船』1929年9月25日 戦旗社

小林多喜二『蟹工船』改訂普及版 1930年3月18日 戦旗社

中国語版『蟹工船』1930年4月15日 上海大江書舗※潘念之訳。もっとも早く紹介された海外版。国民党政府により発禁。その後続けてロシア語・ドイツ語・英語版も刊行され、日本のすぐれた革命作家として国際的に広く知られた。

小林多喜二「支那訳の序文」（一九二九・一二・七）ノート稿（複製）

小林多喜二水彩画「石狩川河口（仮題）」「忍路湾（仮題）」「静物（仮題）」※小樽高商在学時のものと思われる。

小林多喜二『防雪林』1948年8月1日 日本民主主義文化連盟

小林多喜二「防雪林」ノート稿（複製）

磯野小作争議関係檄文等ビラ（複製）

小林多喜二「不在地主」原稿（複製）

「不在地主」執筆直後の小林多喜二（写真）

北海道拓殖銀行小樽支店（開業当時の絵葉書）

小林多喜二ハガキ雨宮庸蔵宛 昭和6年（1929）8月30日（消印）※雨宮庸蔵は当時『中央公論』編集者。「不在地主」執筆の進捗状況を知らせたもの。

小林多喜二封書雨宮庸蔵宛 昭和4年（1929年）10月24日（消印）※便箋2枚。（概要）「不在地主」掲載に感謝、しかし「削除、省略」とその仕方に遺憾の意あり、再掲出来ぬなら『戦旗』への掲載を考慮する。

小林多喜二ハガキ雨宮庸蔵宛 昭和4年（1929）11月29日（消印）※（概要）「不在地主」等のため銀行を解雇され、執筆に専念。

小林多喜二「戦ひ」所載『戦旗』1929年12月号 1929年12月1日 戦旗社※「不在地主」の『中央公論』で削除された部分

小林多喜二『不在地主』1930年1月20日 日本評論社

自大正十二年一月六日至大正十三年十二月三十一日辞令書割印簿

大正十四年一月辞令簿

北海道拓殖銀行職員表昭和三年一月一日現在

北海道拓殖銀行職員表昭和四年一月一日現在

銀行内部資料コピー※小林多喜二論旨解職の事由、退職手当金額などが書き込まれている。

青木恵一著『日本農民組合運動史』1931年2月25日 大衆公論社※小林多喜二旧蔵

- 小林多喜二『工場細胞』第5版 1930年7月25日 戦旗社
- 小林多喜二『沼尻村』1932年8月30日 日本プロレタリア作家同盟出版部
- 「新女性気質」切り抜きと挿絵原画※『都新聞』1931年8月～10月連載。のちに「安子」と改題。
挿絵・大月源二
- 『文芸家協会会員名簿協会規定』1932年版※小林多喜二旧蔵
- 小林多喜二「転形期の人々」ノート稿※小樽の全景を描写した冒頭部5枚
- 『ナッパ』1931年10月号(1931年10月8日)全日本無産者芸術団体協議会※「転形期の人々」
連載。挿絵大月源二
- 『転形期の人々』第4版 1933年9月14日 改造社
- 『地区の人々』1933年5月8日 改造社
- 小林多喜二色紙「我々の芸術は飯を食えない人にとっての料理の本であってはならぬ三一・一一・
一〇 小林多喜二」(複製)
- 小林多喜二文学碑文拓本
- 岡本唐貴画「同志小林多喜二の死面」1933年2月20日 油彩・キャンバス
- 小林セキ遺筆「あーまたこの二月の月が……」(複写)
- 小林多喜二デスマスク(ブロンズ・複製)